記者席から

アイルビーバック

産経新聞　高山（たかやま）　豊司（とよじ）

「アイルビーバック！」。そう叫んだ、1月14日の馬淵澄夫前国交相の退任会見は、ある意味痺（しび）れた。「大臣の発言として軽い」「スベってる」など、不評の声も聞かれるが、大臣は記者の質問に応えただけ。悪いのは質問した記者（私）です。

「ターミネーターなんだから、去るときはアイルビーバックだろ」。退任が噂されたときからそう考えていた。馬淵氏は、鉄建機構の余剰金を巡る財務省との交渉で、野田佳彦財務相から「まるで（映画の）ターミネーターのようだ」と皮肉られた。これは、1兆5千億円もの余剰金を財務省に取り上げられないため、反論を重ねた馬淵氏の頭の良さを表現した（らしい）のだが、趣味がボディビル、腕の周囲長41センチを誇る馬淵氏は外見上も…。

問題は、「戻ってくるぜ」という言葉が、馬淵氏の状況に合っているかどうか。例えば本家のシュワルツネッガー氏でさえ、カリフォルニア州知事を退任する際に、決めゼリフを口にしたら反応は「Ｂｏｏ…」であろう。任期中、州財政を立て直せなかった責任を感じていないのか、戻ってくんな、となる。馬淵氏はどうか。任期中の業績、退任の経緯、人柄を精査し、判断した。「ウケる、いやイケる」。

もう一つの問題は、私がそんなことを大臣にいわせてよいのかという点。幹事社だし（当時）、そもそも国交省クラブは誰でも発言していいのだが、この手の質問は、スベると互いにダメージが…いや、質問者、回答者の人間力が問われてしまうのだ。私は、自分に質問者の資格があるか、半生を振り返ってみた。記者の経歴はろくでもないので省く。

岩登りのキャリアはざっと25年。天井のようなオーバーハングをよじ登る、映画「クリフハンガー」でおなじみのあれである。高校生の頃は近所の石垣を登り、通報されることもしばしば。地方の大学生時代、海岸の岩壁に目を付け、登りまくったが、東京で開かれた全国大会に出てみたらほぼ最下位。大田区出身であることを忘れ「東京はスゲェ」と落ち込んだこともある。

最近は、人工の壁にプラスチックの凹凸を取り付けた商業ジムが台頭。42歳の現在でも通い詰め、限界を少しずつだが押し上げている。並行してボクシングも5年やっていた。要するにスタローン的半生で、ターミネーターとある意味互角な気がした。

1月14日早朝、近所の公園で懸垂100回をこなし会見に臨んだ。同時刻、馬淵氏もジムで筋トレしていたらしい。まさに互角…。

会見は長時間に及んだ。馬淵氏からは退任の悔しさが滲み出ている。質問も尽きたころ、おそるおそる手を挙げた。「大臣はターミネーターと恐れられ云々、タフネゴシエーターでゴニョゴニョ…、あのー決めゼリフお願いします！」。テープを聞き返すと声が震えていて笑える。

「ご要望があるようですから」。そう前置きした馬淵氏は、意を決したように最後の挨拶を述べたあと、すばらしい発音で「アイルビーバ～ック!!」と叫んだ。国交相に戻りたいのか、内閣に戻りたいのかは不明だったが、会見場は大ウケ。これ以降、馬淵氏はことあるごとにこのセリフを連発しているらしい。このように、記者クラブには質問1つとっても、生きるか死ぬか、やるかやられるかの緊張感が満ちているのである（笑）。